

教育長賞

矢口 紗世 (やぐち さよ) 甲ノ原中 2年生

作品名:「世界地図の下書き」を読んで

図 書:世界地図の下書き

「頑張ってみればいい。」

この本を読み終えたとき、そう言われた気がした。

私が読んだのは、「世界地図の下書き」という本だ。読み始めるとき、私は本が教えてくれることを「本からのメッセージ」とし、そのメッセージを探しながら、ページをめくっていった。

この物語は、主人公太輔を始めとする児童養護施設の子供たちの成長を描いたものだ。いじめに悩む淳也と麻利、母親からの虐待を受ける美保子、自分の夢をあきらめなくてはならない佐緒里。そして、両親を亡くし、新しく施設の仲間となった太輔。それぞれが心に傷を負いながら、これからの人生をどうするのか、悩み、迷う。そんな中、佐緒里のために「蛍祭り」を自分たちだけで復活させようと、太輔を中心に作戦を立てる。

私が印象に残ったシーンは、祭りの復活のための作戦を実行している所だ。私は、誰かのために、寝る時間を削ってまで努力したことがない。さらに、自分たちだけで大きなことを成し遂げよう、という決断や、彼らを動かす佐緒里への強い気持ちはすごいものだと思ったからだ。決して器用ではないが、そうやって一生懸命だった彼らだから、私はその姿に心を打たれたのだと思う。また、このシーンから学ぶべきことがたくさんあった。私のできないようなことも、当たり前にならしてたり。とても真っ直ぐな所は、うらやましいとも思った。

彼らが努力している姿は、題名にある、世界地図の下書きをしているように思えた。「世界地図」が大きな目標で、そのための努力が「下書き」だ。そこで、考えてみた。私は、世界地図の下書き、つまり目標のために努力をしたことがあるのか、ということだ。考えてみると、都道府県の下書き位のレベルなら経験があった。例えば、学校行事の計画やテスト勉強、習い事の練習だ。それを乗り越えて、自分なりに色をぬれば、地図が出来上がる。ならば、私の世界地図とは何だろう。

考えてみても、今はまだ分からないが、今のうちに都道府県の下書きからしっかりとやって、備えておこうと思う。

そして、私が大きな目標にぶつかる時、次のことを心がけたい。

一つは、できないと決めつけないこと。

もう一つは、できるところまであきらめないこと。

これらは、太輔達の佐緒里を想う強い気持ちから、彼らが当たり前のようにしてできていたことだ。祭りに必要なランタンの材料が分からなければ、家族とのわずかな思い出をよみがえらせた。時には盗みもした。やり方が良いとは言えないが、あきらめようとしたり、無理だと言うことはしなかった。彼らの意志は、とても強いものだったのだ。

私は、彼らとは反対に、固定観念にとらわれてしまうことがあり、大きな目標を目指すことをためらってしまいがちだ。それに比べて、彼らの自由な発想や決めたことを必ず実行するということはやはりすごい。でもこれからは、彼らのようになれるよう、挑戦してみようと思う。

今まで私は、結局あきらめるのなら、最初からあきらめた方が良いと思っていた。けれど、この本を読んで、その考えはおかしいのだと、ようやく気づくことができた。

何もやらなければ、時間は使わずにすむだろう。だけど、できるところまで頑張ったのなら、その時間は無駄にならない。きっと努力した分だけ、地図の完成に近づいていくはずだ。だから、あきらめることになるかもしれないけど、挑戦してみる価値はあると思うのだ。

「世界地図の下書き」を読み終え、私がこの本からのメッセージだと感じたこと。それは、

「頑張ってみればいい。」

ということなのだと思う。コツコツと努力をするのが苦手な私へ。できないと決めつけて、あきらめてしまう私へ。私にぴったりのメッセージだ。このことをしっかりと受け止め、これからは、やりたいことが難しくても、正直に挑戦したいと思う。太輔たちのように前を向いて、世界地図の完成を目指して、私なりに。

もしこの先つまづいても、今、私が決意したことを自分に言い聞かせよう。もしこの先悩んでも、太輔達もそれを乗り越えてきたということ思い出そう。そして、世界地図が完成したら、

「頑張ってみればいい。」

という、私の考え方を変えた、この本からのメッセージに感謝しよう。